

第三百五十回 青葉会

平成二十七年五月二十八日(木) 午後五時半〜八時半 丸紅来客食堂(談話室)

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生(御自宅でリハビリ中)

今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤保明 小西弘子

〈出席者〉 豊田ゆたか 中野一灯 中山芳博 山崎亜也 山内天牛

伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 古田昇 星田啓子 宮内規雄

渡邊盛雄

赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章

福島正明 村田くに子 山崎青史 山本三恵

《紙上選句》

十一點 ☆ 病む妻に薰風の窓少し開け

(☆:「に」↓「へ」) 芳博 (万・眞・恭・孤・五・弘・保・敏 隆・允・青・天)

七點 ☆ 鮎跳んで刃金のひかり放ちけり

孤舟 (万・猛・五・龍・敏・ゆ・灯)

六點 ☆ 母の日を何の祝と問ひ給ふ

堂哉 (万・孤・千・允・亜・青)

☆ 再診の朝に咲きけり七変化

(☆:再診の不安が紫陽花の希望色に変わります) 盛雄 (万・眞・猛・孤・五・ゆ)

五點 ☆ 植田風遠くへ心放ちけり

(☆:語順を変えてみれば↓「遠くへと心を放つ植田風」) 孤舟 (万・恭・忠・允・三)

青葉風サイゴン陥ちて四十年

(☆:「青葉風」↓「深緑や」) 五郎太 (紀・彦・弘・正・亜)

四點 馴染み妓(三)に行き合ふ銀座更衣

(☆↓「衣更へ馴染の妓に遇ふ銀座かな」) 紀久男 (彦・灯・亜・三)

日の光明かるく通す柿若葉

(☆↓「陽光に明かるく透くや柿若葉」) 恭延 (猛・保・千・灯)

翡翠(かわせみ)の水一撃や魚跳ぬる

孤舟 (忠・千・灯・芳)

走り根の重なる山路ほととぎす

弘子 (万・眞・猛・三)

すぐそこと言はれて遠し麦の秋

ゆたか (堅・眞・正・天)

三陸は岬(さき)また岬や青葉潮

(☆↓中七「岬(みさき)や岬」) 一灯 (万・弘・青・天)

三點 三陸は岬(さき)また岬や青葉潮

(☆↓中七「岬(みさき)や岬」) 全 (紀・敏・く・青)

マイウエー聴くペランダのトマトかな

盛雄 (紀・孤・彦・芳)

涼しげに舞台を締める菊五郎(團菊祭)

紀久男 (敏・允・天)

(☆:上五↓「涼やかや」) 全 (紀・敏・く・青)

玄関の百合に挨拶家を出る

恭延 (保・千・隆)

病む友と初夏の蔵王を眺めたり

忠彦 (万・ゆ・隆)

代播きに月山の水流れけり

全 (孤・弘・天)

(☆↓「代播きへ月山の水流れ来し」) 弘子 (孤・保・芳)

コンテナの貨車の狭間や麦の秋(濃尾平野)

(☆↓「麦秋をコンテナ貨車の狭間から」) 堂哉 (万・眞・く)

亡き友の病床日記明け易し

ゆたか (忠・敏・亜)

牡丹散る午前零時の月光に

全 (保・隆・く)

海鳴りの吾呼ぶ声す夏かもめ

一灯 (万・青・三)

☆ 武蔵野の空揉む瑞枝(みずさき)夏つばめ

全 (万・弘・隆)

☆ 競漕や校旗はためく対抗戦

正明 (彦・五・龍)

夏めくやトロンボーンの音の揺れ

全 (紀・龍・ゆ)

(☆:リズム感を強めて下五↓「音揺るる」)

葛切や頼り無いのが気持良く

昇 (千・允・正)

うららかや大仏殿の鴟尾光る

葉裏にも光透かして立夏かな

☆ 遠洋へ向かふ出帆夏来る

姥捨を謡ひつ酒酌む夏の月

(☆：中七↓「謡ひつつ酌む」)

☆ 先ず親がそして子が吹くしやぼん玉

☆ 鯉食ふブラジルからの珍客と

(☆：「食ふ」は如何にも粗い表現なので↓「賞(めづ)」)

二点

☆ 山道を辿る背を押す青嵐

☆ 芝居はね関鯖焼いて酒四合

明けやらぬ雲海抜けて鳥語かな

バス停の小さき董に見送らる

ほーほけきよ連山すべて若葉かな

☆ 潮風のデイナークルーズ星涼し

巢立ち鳥何を啄む右左

吹矢撃つ的に緑陰揺れ動き

旅にあれば見栄は投げ捨て更衣

浪速弁(なにわべん)の自慢聞きつつ鱧の皮

☆ 指しやぶるやうに蟹食ふ快樂かな

紫陽花の色変はるごと胸の奥

わくら葉の踏みしだかれ居て竹箒

若葉風半島を出て湾渡る

春宵や酒に飲まれて救急車

薫風や秩父観音めぐる旅

天地満つ自然のちから今日小満

輝ける代田に静かな蔵王山

鯖を釣るべか味噌煮か一夜干し

郭公の森飯盒の朝動く

万緑や障子の内のほの暗き(季重なり)

薫風や寛治の言葉委をつくし(玉男襲名)

常磐津「十万億土」

冥土でも手をつなぎてや夏初め

海はキス山はオクラの千鳥かな

夏晩に猫が見上げるマリア像

ダービー馬尻尾にリボントロットで

芝犬の巻き尾青葉の展望台

軒寄する街道小さく水打たる

箸不器用呪いつ絹漉冷奴

いたづらに母の倍生き冷し酒

☆ いびきかき泡盛一壺(ニ)抱きて寝る

風薫るシルクロードの秘宝展

死の床の樂(がく)はシヨパンぞ風薫る

白鷺の漁(すなどる)を見んとて小半時

☆ 若き日のミラノの味よ浅蜷食ふ(ボンゴレ)

夏酒宴論客黙し眠り込む

啓子 (千・ゆ・芳)

亜也 (万・五・く)

全 (堅・弘・三)

天牛 (万・堅・正)

全 (万・忠・隆)

そらお (万・保)

紀久男 (万・灯)

全 (恭・五)

恭延 (堅・龍)

忠彦 (恭・天)

孤舟 (万・允)

保明 (堅・く)

全 (忠・灯)

健介 (紀・芳)

恵洲 (彦・ゆ)

芳博 (万・猛)

啓子 (紀・彦)

全 (紀・亜)

そらお (紀)

猛 (忠)

全 (く)

全 (龍)

忠彦 (龍)

全 (紀)

孤舟 (恭)

五郎太 (堅)

全 (紀)

全 (紀)

全 (三)

保明 (恭)

全 (青)

弘子 (眞)

全 (芳)

恵洲 (猛)

一灯 (紀)

芳博 (万)

昇 (正)

規雄 (紀)

亜也 (正)

天牛 (万)

全 (亜)

●次回青葉会

六月二十五日(木) 午後五時半から八時半

(丸紅 談話室)

▲当季雑詠五句 投句二句

七月二十三日(木) 午後五時半から八時半

(丸紅 談話室)

以上文責 紀久男

一 昭和60年(1985年) 8月発足して30年目。350回青葉会は期せずして選者交代の大きな節目となりました。始まる前に所用で欠席される啓子さん、醤油煎餅と芋焼酎「かねきゆうかろん」(宮崎)そして龍平さんから預った赤ワイン「RESERVAのTAMARI」(アルゼンチン)を届けに来られました。出席は久しぶりに13名。投句9名。遠出の叶わぬ万里子先生御欠席のまま、米寿と快気祝の乾杯してから開始。弘子さんから萬縁多摩句会(5月9日。吉祥寺)に万里子先生が元氣な姿を見せられたこと(杖なし。いつものリュックスタイル)。終了後、近くの上海ガーデンでの弘子さん新人賞祝いにも出席されたこと。祝宴だけ小生も参加。先生と隣り合わせ。後継者に孤舟さんで一致。報告あり皆さん大喜び。先生の選評・添削が大好評で全員配付すること決定。

天牛さんより丸紅飯田OGの松浦(旧姓水口(みなぐち)和子(俳号・加古)さん(昭和32年入社。野澤節子に師事。「蘭」の三代目主宰)の紹介があり「蘭」の近刊号と孤舟さん持参の「俳句四季」7月号(『今月の華』として松浦加古さんの自句自解をカラーで二頁。『編集者競詠』として孤舟さんの七句を掲載)及び「爽樹」5月号を回覧。

弘子さん寄贈たねやの饅頭と最中、忠彦さんの純米酒「桃の滴」(伏見)、小生の豆腐もろみ漬「秘伝豆銘(とうべい)」(熊本)等を賞味。

披講する前に小生から後継者に孤舟さんをお願いしたい旨提案。先生及び正明さん恵洲さんらの賛同を得て。満場一致拍手喝采で承認されました。いつもの猛さんの披講で、御覧のように芳博さんの句がダントツでした。二次会はいつもの三幸園ですが、五人も参加されました。

二 関係者近詠

梅散るや早やびつしりと小さな実 万里子 亡妻やこぼるる花の合間より 規雄

花盛り半歳ぶりの床離れ 全 行き場なき核の塵かな土手青む 池田澄子選

亡き父母の愛唱讚美歌聖週間 全 毎日新聞兵庫文芸5月27日 若森京子特選

よちよちも四世代寄り復活祭 全 和田悟朗先生追悼

一年生雨傘までも真つ黄色 全 浅春の暗(くらがり)峠悟朗消ゆ 盛雄

風立つや蕨の若葉を翻し 全 神戸から生駒に光る別れ霜 全

梅の実の面紅らみ謝恩会 全 選評は太刀筋のごと冴返る 全

着席を強ひて黄砂の街のバス 眞希子 姫神は多産におはし稲の花 松浦加古

再選へ不信任一票辛夷散る 全 水音は変口長調山葵沢 川口襄

遠来の友を露味嗜寝かせ待つ 全 地球儀に紛争地なし聖母月 全

式終へし母等潜るよ花ミモザ 弘子 万緑や水車は詩を紡ぎ出す 全

ふつと吐く胞子の緑つくづくし 全 渓谷の光る波打つ夏つばめ 全

もんどりを打つて春田の去年の株 全 砂浜は遙かに広し夏の鶯 全

貝混じる砂地草の芽紅く立つ 全 緑陰の風は流離や我もまた 全

三月の日差し和毛とかよふかな 青史 星涼し遺影は物を言ひたげに 全

戦なき世永くもがなと雛飾る 全 水ぬるむ鯉の白きが浮かみ出て 松浦加古

また妻に先を越されし初音かな 全 橋の影ゆらめく中へ春の鴨 全

花こぶし垂れし花卉の今落ちぬ 全 砂犬は狼にして蝮草 全

庭木の葉揺らしては止む春の風 恭延 風光る皇后のごと手を取られ 全

春の野や会ふ人会ふ人福々し 忠彦 挿子木も山椒の木なり若芽和 全

アラブにてまた命散る涅槃西風 全 旧石器時代の石か竹の秋 全

花待たではんなり米朝逝きたまふ 紀久男 花きぶし母手鏡を枕辺に 全

「萬縁」 六月号 街騒やひひなの牛車傾ぎける 全

やはらかき雨音の中蝌蚪生る 盛雄

物の怪を案内するかに黒揚羽 全

群れなして柄長賑はず木の芽山 紀久男

「蘭」 六月号